

第5回 男性の家事参画

日本総合研究所 創発戦略センター
ESGリサーチセンター スペシャリスト 小島 明子



「支店長を目指したい」—銀行員である妻が育休中に発した言葉です。男性優位の時代に窓口担当で入行した妻の突然の宣言により、私と妻の家事分担は7対3になりました。専業主婦家庭の同僚をうらやましく思う時もありますが、息子と手をつないで保育園まで歩く道りは、私の人生で最もかけがえのない時間となっています。クリスマスにプレゼントしたバットとグローブは少し大きかったようですが、早くキャッチボールができたかと心躍らせている元高校球児です。(研修担当・30代男性)

1. はじめに

第4回では、シニア人材の活躍について取り上げました。高年齢者雇用安定法の改正や、少子高齢化に伴う労働人口の減少などを背景に、定年を迎えた後も働き続けるシニアが増えると考えられます。しかし、定年を迎えた後の働き方は、現役時代と異なり、職場以外にも居場所を持ちながら、充実した生活を送ることを理想とされる方も多いのではないのでしょうか。

多くの方は定年後、家庭が生活の中心になると考えられます。家庭内で居場所を持つためにはあらゆる方法が考えられますが、その一つとして家族のために家事を担うことが挙げられます。特に今まであまり家事に携わってこなかった男性は、早いうちから家事参画をしておくことが、定年後の家庭での居場所づくりにつながると考えられます。そこで、第5回は、「男性の家事参画」について取り上げます。

2. 家事分担の理想と現実

株式会社日本総合研究所「東京圏で働く高学歴女性の働き方等に関するアンケート調査結果(第二回目)」(2017年)では、共働きの女性を対象に、家事・稼得分担の現実と理想を尋ねています【図表1】。妻が担う家事分担の割合を見る

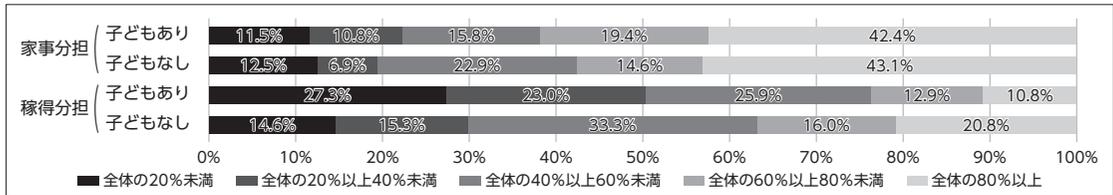
と、子どもがいる夫婦および子どものいない夫婦共に「全体の80%以上」が最も高くなっています。「全体の60%以上80%未満」まで含めると、子どもの有無を問わず、いずれも約6割の夫婦において妻の家事分担の割合が60%以上になっており、夫に比べて妻の家事負担の割合が多いのが現状です。さらに、妻の家事分担の割合が60%以上の夫婦と比較すると、子どもがいる夫婦のほうが、子どものいない夫婦に比べて、妻の負担がやや多いことが分かります。

一方、世帯収入のうち妻の稼得が占める割合を見ると、子どものいない夫婦においては、「全体の40%以上60%未満」(33.3%)が最も多いのに比べて、子どもがいる夫婦においては「全体の20%未満」(27.3%)が最も多くなっています。子どもがいない時には夫婦で同程度の収入を稼いでいても、子どもができると妻側が家事を多く引き受け、仕事を減らしている状況が想像できます。

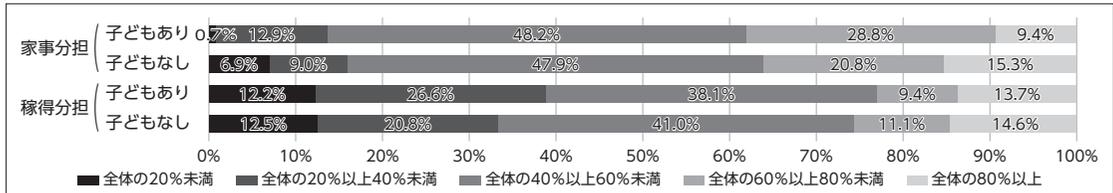
では、この現実に関して、妻側の理想との間にギャップはあるのでしょうか。妻が担う家事分担の理想の割合を見ると、子どもがいる夫婦および子どものいない夫婦共に「全体の40%以上60%未満」が最も高く、約半数を占めることが明らかになっています。多くの妻は、夫に家事全体の半分程度は担ってもらいたいと思っている状況がうかがえます。さらに、世帯収入における妻の稼得分担の理想の割合を見てみると、

〔図表1〕 妻の家事・稼得分担割合の現実・理想

〔現実〕



〔理想〕



出所：株式会社日本総合研究所「東京圏で働く高学歴女性の働き方に関するアンケート調査結果（第二回目）」（2017年）

こちら子どもがいる夫婦および子どものいない夫婦共に「全体の40%以上60%未満」が最も高く、約4割を占めています。

一般的に、女性は出世や昇進に対する関心が低く、仕事よりも家庭に比重を置いた働き方を望んでいるようなイメージを持たれることも少なくありません。しかし、実際には、現状よりも夫に家事を分担してもらい、自分の仕事の時間を増やしたいと思っている女性が多いのです。このことから、夫側の家事参画次第で、女性はより仕事で活躍でき、高い収入を得られる可能性があることが指摘できます。

3. 男性の家事参画に対する意識と行動

東京都は、2019年に未就学児を持つ夫婦等を対象として「男性の家事・育児参画状況実態調査」を実施しています。この調査では、男性が家事・育児に積極的に参画することについて尋ねたところ、「賛成」は60.4%、「どちらかといえば賛成」は24.8%となり、合計で8割を超えることが明らかになっています。男性の家事・育児参画のイメージを尋ねると、「男性が家事・育児を行うことは、当然だ」という回答が59.1%で最も多く、「夫婦間の関係にいい影響を及ぼす」(47.2%)、「子供にいい影響を与える」(46.8%)と続いています。この結果からは、男

性の家事参画への意識が非常に高いことが分かります。

現在の家事分担状況を内容別に尋ねると、「主に自分が行っている家事」と答えた割合は、「ゴミだし」を除く全ての項目で女性が男性を上回っており、「炊事」(87.0%)、「洗濯」(79.4%)、「掃除」(74.5%)の順に女性が担う割合が高くなっています。「夫婦で分担している家事」は、男性は「買物」が57.1%、女性は「ゴミだし」が43.3%で最も多くなっています〔図表2〕。

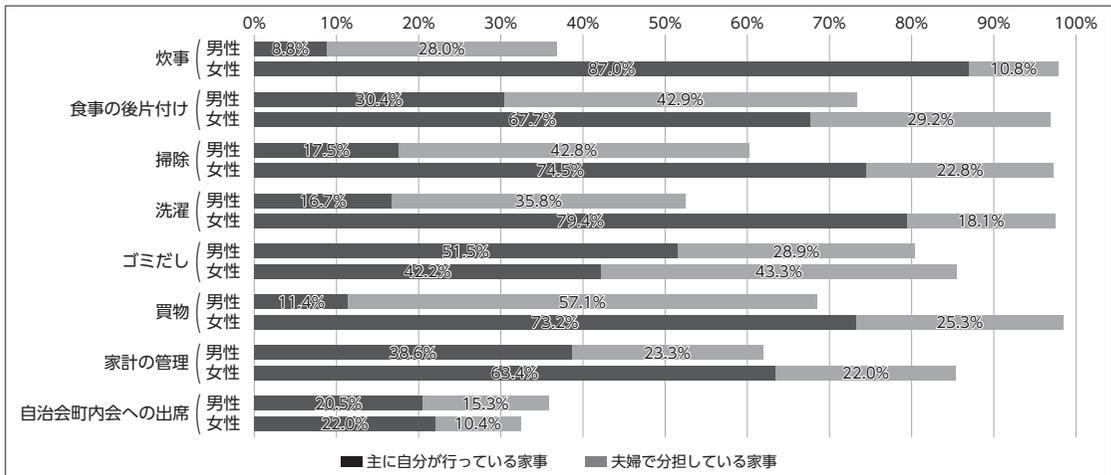
同調査では、男女別に家事・買い物にかかる時間の調査も行っています。「配偶者あり・未就学児あり」の男女に限って見ると、週平均の家事・買い物時間は1日当たり男性63分、女性136分となり、子育て世代の女性の家事関連時間は男性の2倍を超えています。その背景としては、「炊事」をはじめとし、手間のかかる家事の分担ができていないことが問題として挙げられます。男性の家事参画をより進めていくためには、家事であればなんでもよいということではなく、負担の重い家事の分担の在り方を、各家庭で検討していくことが必要なのだと感じます。

4. 男性の家事参画(炊事)に必要なこと

ベターホーム協会が、料理教室に6カ月以上通った20～80代の男性受講生に対して行ったア

〔図表2〕家事内容別分担状況

(男性) n=1548 (女性) n=1556



出所：東京都「男性の家事・育児参画状況実態調査報告書（概要版）」(2019年12月)

アンケート調査によれば、7割以上の男性がためらいなく、気軽に料理教室に参加しています。

さらに、料理教室に通う前と調査時（6カ月以上通った後）それぞれで、家での料理頻度の変化を分析したところ、料理教室に通う前は「料理をする」（月に2、3回以上料理をする）人は31.3%でしたが、通った後では83.7%と52.4ポイントも上昇しているのです。特に60代においては、料理教室に通う前は「料理をする」人はわずか23.9%でしたが、通った後は83.6%となっており、59.7ポイント上昇しています。このほか、料理をするようになったことで、家族への感謝の心が生まれたり、興味・関心の幅の拡大や新しい人間関係の構築につながったりするなど、料理のスキル以外にもさまざまな効果が得られています。

家事分担の問題は、時には話し合いがうまくいかず、夫婦間の関係を悪くすることもあります。しかし、妻が担う家事の多くが炊事であることを踏まえれば、料理教室に通う、あるいは、簡単な料理を家で作るなど、男性が炊事を担う

きっかけをつくるのが何よりも大切なのだと感じます。

5. 最後に

家事分担の問題は長年、女性の活躍を進めていく上で大きな課題となっています。諸外国と比べても、日本男性の家事分担の時間は少ないのが現状です。この課題においては、家事分担に関する時間が問題として多く取り上げられますが、家事分担の質の部分を変化させていく（例：時間がかかり負担の大きい炊事について、部分的にでも男性が担うことで女性の負担を減らす）ということが本質的な改善につながるといえます。そのためには、男性の家事スキルを上げるための工夫や努力が必要だと考えます。

家事分担というと、家庭内での面倒で嫌なことの押し付け合いというイメージに捉えられることも少なくありませんが、家事を学ぶという姿勢で取り組めば、それも将来何かに役立つスキルになるかもしれません。

こじま あきこ 株式会社日本総合研究所 創発戦略センター／ESGリサーチセンター スペシャリスト。CFP® 認定者、1級ファイナンシャル・プランニング技能士。金融機関を経て、株式会社日本総合研究所に入社。環境・社会・ガバナンス（ESG）の観点からの企業評価業務に従事。その一環として、女性を含む多様な人材の活躍推進に関する調査研究、企業向けに女性活躍や働き方改革推進状況の診断を行っている。主な著書に『女性発の働き方改革で男性も変わる、企業も変わる』（経営書院）、『「わたし」のための金融リテラシー』（共著・金融財政事情研究会）。